Osaka University Knowledge Archive

Title	自分の思いが伝わる場所 : 大阪市立市岡中学校日本語教室
Author(s)	林, 貴哉
Citation	未来共生学. 2018, 5, p. 273-284
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68218
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

自分の思いが伝わる場所

大阪市立市岡中学校日本語教室

林 貴哉
大阪大学大学院文学研究科博士前期課程

写真 1. 市岡中学校日本語教室

名称：大阪市立市岡中学校　帰国した子どもの教育センター校日本語・適応指導教室
場所：大阪市港区
設立年：1990 年
活動内容：外国から大阪市内の公立中学校に編入してきた生徒に対して、日本語教育や適応指導を行っている。担当教員は 2 名で、約 40 名の生徒を指導している。

1. 言葉と出会う

私が市岡中学校日本語教室に初めて訪れたのは、1年間のベトナム留学から帰国したばかりの2016年9月であった。プラクティカルワークのひとつである「公共サービス・ラーニング」において、それから半年間「大阪市立市岡中学校帰国した子どもの教育センター校日本語・適応指導教室」(以下、市岡中学校日本語教室)で活動を行うことになった。外国から日本に来たばかりの中学生に日本語を教えることが主な活動であった。

大学院に入ってからベトナムに留学したのは、日本に住んでいるベトナムの方々とベトナム語を使って直接話がしたいと思ったからである。ただ、そもそも私が言葉に興味を抱くようになったきっかけは、中学校の頃にあった。当時、通っていた中学校にはブラジルからやって来た生徒がいた。普段はみんなと一

緒のクラスで勉強するが、教科によっては、別の教室に行って日本語を勉強していた。私は「彼は普通に日本語が話せるのに、どうしてわざわざ他の教室に行って日本語を勉強するのだろう」と気になっていた。しかし、何も確かめることができないまま、時は経ち、私は高校3年生になった。受験大学を決める際、中学生の時の記憶に引っかかるものがあり、日本語教育について勉強できる大学を探した。無事、入学することができたものの、大学に入ってからは、日本語を教えることよりも、自分が外国語学習をすることに目覚めてしまった。大学では英語の他にも第二外国語が必修となっているが、中国語の授業に出ることにした。その他にもラジオ講座や語学学習用のウェブサイトなどを使って、ドイツ語やポルトガル語など、いろいろな言葉を広く浅く勉強してみた。その中でも大学3年生から始めたベトナム語とは縁があり、大学院生になってからは、ついにベトナム語を究めようと留学までしてしまったのだった。

こんな話から始めると、語学に苦手意識を持つ人からは、「私はあなたとは違って中学校、高校とやってきた英語すらできないのに…」と拒否反応を示されてしまうかもしれない。でも、そんな人にこそ、想像してもらいたい。もし、明日から、言葉が通じない場所に住むことになったらどうなるのだろうかということを。

私のように自分の意志で留学をする大学生や、仕事をするために来日する大人とは異なり、多くの子どもたちは親の都合で来日し、日本の学校で勉強することになる。母国で日本語を学んでから来日する場合もあるが、そのような生徒は少数で、日本の学校に通うようになって初めて日本語の学習を始める生徒がほとんどである。市岡中学校日本語教室の先生とそこに通う生徒たちは、お互いに新たな言葉に出会い、自分の意図が伝わらない経験をする。しかし、そういった状況においても、表現方法を模索することで、自分の思いを伝えていく。本稿では、このような、市岡中学校日本語教室の先生と生徒の間でのコミュニケーションのあり方を見ていきたい。

2. 複数の学校から生徒が集まるセンター校方式

市岡中学校日本語教室には、市岡中学校に在籍する生徒だけでなく、近隣の複数の中学校からも生徒が通ってきている。日本語指導が必要な生徒が、日本語教育の中核（センター）となる学校に集まって学ぶ形式は「センター校方式」と呼ばれており、大阪市内の中学校では、1984年に豊崎中学校で始まった。

外国から来た児童生徒は、基本的にその子どもが在籍する学校で指導することが原則となっている。大阪市では「受け入れ当初の対応等の相談を受けたり、助言を行ったりするとともに、生活適応や言葉の指導が必要な子どもを通級させてその指導に当たる」こと、また「帰国・来日等の子どもの教育に関する保護者からの相談対応及び実践研究等を行うこと」を目的として「帰国した子どもの教育センター校日本語・適応指導教室」が設置された（市岡中学校創立50周年記念誌委員会 1997）。

正式名称が「日本語・適応指導教室」となっている通り、日本語教室では、日本語指導だけではなく、日本での生活への適応のための指導が行われている。日本語に関しては、約1年かけて初級日本語を学習し、修了試験に合格すると、日本語教室への通級は修了となる。一方、適応指導に関しては、生活や文化に関する項目を取り上げて個別に教えるということはせず、生徒からの質問、要望に応じて行っている。授業では日本語の学習を行うだけでなく、各生徒の母語や文化を教える母語教室が開かれたり、市岡中学校の文化祭や国際理解教育等のイベントにおける発表の準備をしたりすることもある。

現在、大阪市内の小・中学校には、それぞれ4校のセンター校日本語教室が設置されている。市岡中学校もその1つであり、正門のインターホンで挨拶をした後、職員室の前を通り、保健室の隣にある日本語教室に入ると、担当の松田和典先生と山田美佐子先生が出迎えてくれる。

松田先生は、教員免許は英語だが、かつて日本語学校に勤務したこともあり、日本語教室で教えている期間が長い。大学では中国語を専攻していたため、中国から来た生徒と中国語で様々なことを話すことができる。山田先生は、もともとは国語を教えており、2016年度は日本語教室担当の3年目であった。これまで、どのような言語であるかを知りたいという関心から、韓国・朝鮮語や中国語を学んだことがあり、スペイン語、ミャンマー語などの単発の講座にも行ったことがある。さらには、2014年に未来共生プログラムの履修生と港区役所が協働して行った「こどもの居場所」づくりプロジェクトにも参加したことがある

とのことであった。

中国・ベトナムの旧正月グッズや、生徒が出身地を紹介するために作ったカラフルなポスター、海外の絵本や小説がある教室は、それだけでも国際色豊かであるが、そこに通ってくる生徒も多様である。私が公共サービス・ラーニングを行った2016年度には、中国（21名）、フィリピン（6名）、ネパール（4名）、ペルー（3名）、ブラジル（2名）、タイ、セネガル、ベトナム（1名ずつ）から来た、延べ39名が市岡中学校日本語教室に通ってきていた。

普段から市岡中学校で勉強して、日本語教室にも通ってくる生徒は3名であったが、残りの36名は、日本語の時間だけ、他の中学校から市岡中学校日本語教室に通ってくる。市岡中学校に在籍する生徒は毎日、1時間目と4時間目が5教科（国語・数学・社会・英語・理科）の場合は日本語教室で日本語を学習する。その時間が、言葉がわからなくても参加しやすい体育や美術などの科目の場合は、自分のクラスでクラスメイトと一緒に授業を受ける。一方、他校から通ってくる生徒は週2回、午前か午後のどちらかに日本語教室での学習を行う。例えば、午前中に学習する場合は、1時間目に在籍校から市岡中学校に移動し、2、3時間目に日本語の勉強をして、4時間目に自分の学校へ戻っていく。

3. 思いを伝える手助け

先に述べたように、来日したばかりの時期は、生徒も先生もお互いの言葉がわからずに、思いを伝えることができない状態にある。まず、市岡中学校日本語教室での日本語・適応指導のあり方を通して、生徒が伝えたいと思うことを表現できるように、先生方がどのように手助けしているのかを見ていく。また、日本語教室の先生方が在籍校の先生方と生徒の間に立って、いかに意思疎通を促しているのかについても述べる。

3.1「日本語」指導と「適応」指導

日本での学校生活を始めるに当たって、大きな壁となるのが日本語であろう。日本語教室では、第一に基礎日本語の徹底が目指されている。とはいっても、生徒たちが日本での生活において必要なのは、教科書に載っている抽象的な日本語を身につけることだけでなく、普段の学校生活の中で自分が伝えたいと思うことを表現することである。日本語教室では、『みんなの日本語』という教科書を使っているが、この教科書を通して、初級日本語を学び終えるのには、最低でも1年が必要であり、しかも、そこに載っている構文や単語を学ぶだけでは、自分の伝えたいことを言葉にできるようにはならない。山田先生は「それ以外にもその子とのやり取りの中で、日本語を入れていきたい」という部分もあると語っていた。

クラスの中で自分の意志を伝えるには、まず、自分が日本語を使って達成したい目標や自分の興味のある事柄に関連する言葉を知っている必要がある。ある日、国語の授業でブックレビューをする予定であった楊さん（仮名）が、紹介する本を家に忘れてしまった。そこで、来週の授業で発表することにしてもらえないかと国語の先生にお願いする方法を一緒に学ぶことになった。その際、「本」、「忘れました」、「来週」などの表現を挙げ、文法に従って依頼する文を作った。そして、話を聞いてもらえるように、「先生、すみません。ちょっと良いですか？」と会話を始めるための言葉を付け加えた。

来日後しばらく経って、日常生活の言語に慣れてくると、生徒はクラスメイトとのやり取りにも参加できるようになってくる。しかし、特に漢字を使わない言葉が母語の生徒は、理科や社会には専門用語が多いため、教科の学習で困難を抱えることがある。フィリピン出身のマリアさん（仮名）のノートには、「水溶液」、「塩酸」などの漢字が書かれていたが、マリアさんは黒板に書いてあることを写しただけで、意味は理解していないとのことであった。このように、日本語学習がスムーズに進んでいて、授業にも参加できている生徒でも、実は苦労していることがある。そのような生徒の気持ちに寄り添って、学びをサポートしていくのも日本語教室の役割である。

日本語教室では、生徒が日々の生活や休日に行う趣味の活動等に関して、自分にとって必要だと思う言葉を自分で見つけ出し、先生に相談する姿をよく見かける。テスト前は、特に教科の用語に関する質問が多く、松田先生や山田先生も教科書や、辞書、インターネットなどを駆使しながら、どんな内容であっても答えを生徒と一緒に探して、生徒が理解できるように知識を総動員させて解説していた。山田先生は「生徒から突然来る質問が、教科学習のことであっ

たり、日常生活でふと聞いたことであったり、季節の挨拶の言葉であったりと多様で、かつて国語を教えていた時よりも守備範囲が広くなった」と言っていた。

日本語で教科を学習し、テストも日本語で受けなければならないため、日本の学校で生活していくためには、日本語を学ばなければならない。このような側面から日本語教育が必要とされているのは確かである。しかし、市岡中学校日本語教室では、そのような側面だけではなく、生徒一人ひとりが自分の表現を大切にすることが重視されている。生徒から先生に伝えたいことがある時に、日本語では思うように表現できないこともある。その時に生徒は、英語を使ったり、中国語で筆談をしたりと様々な方法を試して表現しようとしていた。先生方も、無理に日本語を使わせるのではなく、母語や英語で生徒の言いたいことを把握してから、一緒に日本語でも表現できるようにするということを心がけているようであった。

このような姿勢は、先生方の「適応」の捉え方にも表れている。前述のように、センター校日本語教室では、「日本語指導」だけでなく、「適応指導」も行われている。とはいえ、学校の規則などについては、普段の生活において、先生に教えてもらったり、周りの生徒を見たりして、生徒はすでに身につけている。松田先生は日本語教室では「意識を広く世界にも持つ」ことが大切であり、生徒に対して「日本人のようにしなさい」というわけではないそうだ。生徒に対して、「ちゃんとあいさつをする」、「靴をそろえる」、「戸を閉める」、「ごみを落とさない」といった、しつけのような意味合いで「あかん！」と言ってしまうことはあるが、「日本に100％合わせなさい」ということは思っていない。山田先生は、学校にあるルールが画一的であり、外国から来た生徒にとっては、窮屈なものになっていると感じている。制服（標準服）を着て登校しなければならない、登校中に飲み物やお菓子を買ってはいけない、また、水筒の中身も水もしくはお茶という決まりがある。また、ピアスをしてはならないという規則にも、生徒は従っている。しかし、それは出身国では普通に認められていたことであるため、生徒が「日本はこうなの？」、「こうしなければならないの？」という気持ちになるのは当然だと山田先生は語っている。

活動をしていく中で、私は日本語教室で行われている適応指導とは、日本社会で生活していくうえで、生徒が抱える疑問や問題を一緒に解決していくことを指すのではないかと考えた。毎回、生徒たちから教科のこと、学校生活のこと、さらには一番近い映画館までの行き方といったことまで、多くの質問を受けた。それに対して一つひとつ丁寧に答えることで、生徒は自分のやりたいことを日本でも実現させる方法を身につけていった。そこから、日本語教室における日本語・適応指導とは、「日本に住んでいるのだから、日本の習慣に合わせなければいけない」というものではなく、日本の生活においても、生徒が自分自身の希望をかなえるための手助けをすることだと考えられる。

3.2 在籍校と日本語教室をつなぐ

生徒が普段在籍する学校の先生にとっては、突然日本語が話せない生徒が通学してくることは、普段のコミュニケーションや生活、学習に関することなど、様々な事柄について戸惑いが伴うものであろう。日本語教室の先生方は、「連絡帳」を通して在籍校の先生とやり取りを行うことで、情報共有をしたり、生徒と在籍校の先生方のコミュニケーションも支えたりといった役割も担っている。

まずは、生徒が普段在籍する学校の担任の先生から、市岡中学校日本語教室の先生方への連絡内容を見ていく。基本的には、在籍校の行事の予定や学校での様子、担任の先生が受け持っている教科での様子などが書かれていることが多い。教科指導に関連して「別教材はありませんか」という質問や、テストの受け方についての相談もある。日本語が初級の生徒は、試験問題の漢字へのルビ打ちや、試験の時間延長、辞書持ち込みの許可といった公立高校の入学試験に準じた配慮をしてもらうことになっている。そのため、どの程度の配慮をするかは市岡中学校の先生が生徒と話し合って決めることもあるそうだ。さらに、「喧嘩しました」と学校でのトラブルに関する報告や、「はじめは全く日本語がわからない状態から、少しうなずくようになり、さらに『わかりました』と日本語で答えるようになった」といった成長の記録を書いている時もある。

担任の先生から日本語教室へはこのような連絡があるため、日本語教室での授業は在籍校の先生が記入してくれた内容を見るところから始まる。生徒に伝えたり、話し合ったりする必要がある時は、日本語教室の先生は、生徒に合わせて、様々な手段を使って伝えようとしていた。わかりやすい日本語で説明す

ることもあれば、生徒の母語で伝えたり、辞書を見せたりしながら丁寧に説明することもある。松田先生は中国出身の子どもと中国語で会話することができ、山田先生も日中・中日辞典など、各言語の辞書を生徒と一緒に引きながら生徒に伝えることができる。在籍校の担任の先生は一つひとつの言葉を辞書で引き、言葉の説明をするといったことに多くの時間をかけられないが、日本語教室は少人数対応であるため、そのような地道なコミュニケーションを図ることができるのだ。

次に、日本語教室から生徒が普段在籍する学校の先生に対する連絡に注目すると、そこには、その回の学習内容や、生徒とのやり取りを通して聞き取ったこと、次回の通級日の予定などが書き込まれている。さらに、日本語教室の先生方は「日曜日にUSJ行った」といった、生徒からの話に出てきたことや、「あまり寝られていない」、「朝ごはんを食べていない」、「しんどそうにしている」といった生徒の様子も書かれている。生徒はだんだん連絡帳の内容が読めるようになってくると、連絡帳に何が書いてあるか見て、「このことは先生いりません」と言ったり、「これは書かないでください」と書く前にストップをかけたりすることもあるそうだ。

連絡帳には、生徒からの質問やお願いを書くこともある。例えば、ネパールでは秋に一番大きなヒンドゥー教の祭り（ダサイン）があり、現地では学校も約1週間休みになる。祭りの期間は毎年変わるが、2017年の祭りの最終日は9月30日（土）であり、ネパールの生徒は家でお祝いをすることになっていた。しかし、その日は土曜授業と重なっていた。ネパール出身の生徒は、山田先生に「その日は学校を休みます」と言ったそうだ。山田先生が「担任の先生はそのことを知っていますか？」と聞くと、生徒は「先生はまだ知りません」と言っていたので、連絡帳に「ネパールの生徒は9月30日に休みたいと思っている」と書いて、担任の先生に伝えたという。

写真2. フィリピン母語教室の様子

4. センター校方式だからできる表現

日本語教室の様子について、松田先生はしばしば「カオス」な状態であると表現する。すべての生徒の学習進度が異なり、開いている教科書のページやそれぞれの生徒が直面している課題にも違いがある。教室ではオオクワガタを飼っているが、飼育ケースから取り出して見せてくる生徒もいる。さらには、教室には中国のボードゲームがあり、中国出身の生徒が5人一緒に来た時には、休み時間に10分だけと言ってゲームを始めることがあった（といっても、10分では終わらずに、先生が他の生徒の指導をしている間も、ゲームは続いていた）。このように、「カオス」という言葉には、生徒が自由にふるまえるという意味もあるが、生徒の抱える困難さが多様だという面もある。松田先生は「しんどい子らのサポート」をするという気持ちで日々の実践に取り組んでいると話していた。

前節で見たように、市岡中学校日本語教室では、一人ひとりの生徒に応じた指導をしているが、現在は日本語教室に通う生徒の人数が多く、指導が追いつかなくなってきている。山田先生は、教える際に教師と生徒の比率が、1対4や、1対5となるため、「一人ひとりとのやり取りが十分にできないことが、自分の中ではすごくストレスになっている」と話していた。

一方、教室内が「カオス」になってしまったとしても、現在のように様々な学校から生徒が集まってくることでよい効果も生じている。在籍校のクラスや学年では、外国ルーツの生徒が自分しかおらず、授業がわからなくても、どうすることもできない生徒もいる。そのような生徒も、市岡中学校日本語教室に来ると、同じような境遇の生徒に会うことができ、日本語だけでなく、それぞれの生徒が自分の表現しやすい方法で思いを伝えることができると考えられる。

中国出身の生徒の中には、私に対しても容赦なく中国語で話しかけてくる生

徒がいた。当初、生徒が母語を使うことに抵抗を感じていたが、次第に私の考えは変化していった。公共サービス・ラーニングを始めた頃、中国出身の張さん（仮名）は、日本語で何を話しかけても、多くの場合、中国語で返事をしていた。私の質問にも「Yǒu（有）」（ある）、「Méiyǒu（没有）」（ない）と答え、日本語で「好きな食べ物は何ですか？」と聞いても「Hàn bǎo bāo（汉堡包）」（ハンバーガー）と中国語で答えていた。張さんは他の中学校から通級してくる中国出身の周さん（仮名）と同じ時間に日本語を勉強しているが、周さんともいつも中国語で話していた。このように、日本語教室に来ても中国語ばかり使う張さんに、私は「日本語を使ってください！」と言いたくなっていた。

しかし、張さんは問題の答えがわからない時に「私、日本語できません」と悲しそうに語ることがあった。それ以来、もし中国語を禁止したら張さんが自己表現をする手段を失ってしまうと感じ、無理に日本語だけを使わせることはできなくなった。張さんは、日本語だけでなく、英語や母語の中国語にも困難があり、日本語ができるようになるのかと心配だったが、回を重ねるごとに、進歩があった。2 ヵ月後には「Hàn bǎo bāo」の代わりに「ハンバーガー」と言うようになっていた。

張さんの変化を振り返ると、日本語教室で自分の好きな表現方法を使えることには、重要な意味があったのだと考えられる。張さんが普段生活している中学校には中国語で話せる相手はおらず、日本語が苦手な張さんにとって、自分の考えていることを伝えることができる相手はほとんどいなかった。そのような状況の中でも、日本語教室に行けば、中国出身の生徒に会うことができ、さらには日本人の先生に中国語を使って自分の思いを伝えることができる。当時、張さんが日本語で言える食べ物は「うどん」であった。もし、日本語教室で使える言葉が日本語のみであったら、本当は「ハンバーガーが好き」であったとしても、知っている「うどん」という単語を使って「うどんが好きです」と答えなければならなくなる。その場合、普段の教室でも言いたいことが言えず、日本語教室でも自分の考えとは異なることを言わなければならなくなる。日本語を使用しなければならないという制限がないことで、自分の思いを表現することができるのだ。

さらに、数ヶ月後、同じ学校から通級するネパール人の後輩ができたことで、張さんはより頼もしくなっていった。山田先生は、走って帰ろうとする後輩に対して、張さんが日本語で「ちょっと待って、ゆっくり～」と声をかけているのを見て感心したと教えてくれた。日本語しか通じる言葉がない後輩に、先輩として接する機会があることが、張さんを成長させたのかもしれない。このような成長があるのも、複数の学校からルーツの異なる生徒が集まるセンター校方式の特徴といえるだろう。

5. 様々な表現が許される場所

ここまでを振り返ると、市岡中学校日本語教室において特徴的な点は、生徒の話に耳を傾ける先生方の姿勢にあるといえる。言葉は一人ひとりの生活に密接に関係したものであり、教科書に載っている文法や語彙を覚えるだけでは、中学校で生活していくために必要な日本語を身につけることはできない。市岡中学校日本語教室に行くと、これまで「授業」だと思っていた教科書や黒板を使った授業のほかに、雑談をしているかのような雰囲気の中で生徒の生活に必要な日本語を教えていることがある。生徒たちも、自分から日常生活での困ったことを相談したり、自分の好きなことを話したりしている。山田先生が中国の歴史を語る生徒の話に耳を傾けることもあれば、私も松田先生と一緒に生徒からのクイズに答えたこともあったりと、先生方は、学習面以外の内容であっても生徒の伝えたいという気持ちを大切にしていることを知った。そのような環境の中で、生徒から何気なく出されるあらゆる質問に丁寧に答えることが、その生徒にとって、日本における生活に必要な学びをもたらしているのである。

適応指導について述べた際にも触れたが、市岡中学校日本語教室の先生方は、生徒に日本人と同じ行動をさせることを目指すのではなく、それぞれの生徒がこれまでの生活ではどうだったのかという話を聞き、現在の学校生活での苦労に共感を示している。普段の学校生活では、生活指導や教科指導を通して、先生から日本で生きていくために必要とされる知識や行動規範を身につけるように促されることは多いだろう。しかし、日本で求められる規範を「やらなきゃいけない」と思うと、生徒は自分を押さえ込むことになってしまう。一方、日本語教室では、日本のやり方とこれまで自分の接してきたやり方を比べること

によって、その両方を理解できると考えられる。このように、日本語教室の先生の役割は、日本語や日本のやり方を教えることだけではない。日本の方法を押し付けるのではなく、生徒がすでに身につけていることについても興味を示し、受け入れている。日本の学校の中にも、そのような態度を示す先生がいるのは、重要なことではないだろうか。

自己表現についても同じことがいえる。教室において日本語しか使うことができなければ、生徒の持つ表現を奪いかねない。もし目の前に自分の得意な言語が通じる人がいるにも関わらず、その言葉を発することを許されないのであれば、その人は自分の持っている表現手段をひとつ失うことになる。「英語の授業は英語で行う」という流れもあるように、学習する言葉以外の使用を禁止する教育現場もある。日本語の教授法に関する書籍や日本語教師養成講座でも、日本語を日本語で教える方法について多くのページ数や時間が割かれており、日本語は日本語で教えるべきだと考えている人も少なくないように思われる。しかし、市岡中学校日本語教室では、日本語以外の言語が禁止されることはなく、様々な方法での表現が行われていた。それは日本語だけでなく、母語が同じ生徒同士によって交わされる中国語やネパール語の時もあれば、母語ではないが日本語より得意な英語で先生や友だちに自分の思いを伝えようとする声もあった。紙に言葉を書くことで伝えようとした生徒もいた。

さらに、自分の思いを伝える手段は言葉だけではない。ホワイトボードにイラストを描いて必死に伝えようとする生徒もいた。このように、日本語教室では、多種多様な表現手段が認められている。そのような環境の中で学習を行うことで、生徒たちは日本での生活をより自分らしいものにしていくことができるのである。

参照文献

市岡中学校創立50周年記念誌委員会
1997 『大阪市立市岡中学校創立50周年記念誌：市岡』